

凡 例

- ★ : 対象事業実施区域
- : 最大着地濃度出現地点 (0.00132 $\mu\text{g-TEQ}/\text{m}^3$)
- : 予測地点

図 5-1-17(2) 施設の稼働に伴うダイオキシン類付加濃度
予測結果 (予測ケース: 排ガス量最小)



1:50,000

0 1 2km

短期予測

短期濃度予測結果は、表 5-1-50～表 5-1-55 及び図 5-1-18～図 5-1-23 に示すとおりである。

接地逆転層崩壊時（フュミゲーション発生時）における排ガス量最大で最も高い濃度となった。

また、最大着地濃度出現距離は、大気が不安定な気象条件下、上層逆転層発生時（リッド状態）、接地逆転層崩壊時（フュミゲーション発生時）及びダウンウォッシュ・ダウンドラフト発生時で 100～450m、一般的な気象条件下で 3,600～3,900m、接地逆転層非貫通時で 10km 以上であった。

表 5-1-50 一般的な気象条件下における短期濃度予測結果

	予測ケース	バックラウンド濃度 ()	付加濃度 (1時間値) ()	将来濃度 (1時間値) (= +)	付加率 [%] (/ ×100)	最大着地濃度 出現距離 (m)
二酸化硫黄 (ppm)	排ガス量最大	0.010	0.0010	0.0110	9.1	3,900
	排ガス量最小	0.010	0.0008	0.0108	7.4	3,600
二酸化窒素 (ppm)	排ガス量最大	0.022	0.0013	0.0233	5.6	3,900
	排ガス量最小	0.022	0.0010	0.0230	4.5	3,600
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	排ガス量最大	0.106	0.0004	0.1064	0.4	3,900
	排ガス量最小	0.106	0.0003	0.1063	0.3	3,600
塩化水素 (ppm)	排ガス量最大	0.001	0.0006	0.0016	37.4	3,900
	排ガス量最小	0.001	0.0005	0.0015	32.3	3,600

注) 気象条件は大気安定度 D、風速 1.5m/s である。

表 5-1-51 大気が不安定な気象条件下における短期濃度予測結果

	予測ケース	バックラウンド濃度 ()	付加濃度 (1時間値) ()	将来濃度 (1時間値) (= +)	付加率 [%] (/ ×100)	最大着地濃度 出現距離 (m)
二酸化硫黄 (ppm)	排ガス量最大	0.010	0.0036	0.0136	26.6	100
	排ガス量最小	0.010	0.0028	0.0128	22.1	
二酸化窒素 (ppm)	排ガス量最大	0.010	0.0046	0.0146	31.4	
	排ガス量最小	0.010	0.0036	0.0136	26.5	
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	排ガス量最大	0.065	0.0015	0.0665	2.2	
	排ガス量最小	0.065	0.0011	0.0661	1.7	
塩化水素 (ppm)	排ガス量最大	0.0010	0.0022	0.0032	68.6	
	排ガス量最小	0.0010	0.0017	0.0027	63.0	

注) 気象条件は大気安定度 A、風速 0.7m/s である。

表 5-1-52 上層逆転層発生時（リッド状態）における短期濃度予測結果

	予測ケース	バックラウンド 濃度 ()	付加濃度 (1時間値) ()	将来濃度 (1時間値) (= +)	付加率 [%] (/ ×100)	最大着地濃度 出現距離 (m)
二酸化硫黄 (ppm)	排ガス量最大	0.010	0.0272	0.0372	73.1	450
	排ガス量最小	0.010	0.0214	0.0314	68.1	
二酸化窒素 (ppm)	排ガス量最大	0.010	0.0298	0.0398	74.9	
	排ガス量最小	0.010	0.0239	0.0339	70.5	
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	排ガス量最大	0.065	0.0109	0.0759	14.4	
	排ガス量最小	0.065	0.0085	0.0735	11.6	
塩化水素 (ppm)	排ガス量最大	0.001	0.0163	0.0173	94.2	
	排ガス量最小	0.001	0.0128	0.0138	92.8	

注) 気象条件は大気安定度 A、風速 0.7m/s である。

表 5-1-53 接地逆転層崩壊時（フュミゲーション発生時）における短期濃度予測結果

	予測ケース	バックラウンド 濃度 ()	付加濃度 (1時間値) ()	将来濃度 (1時間値) (= +)	付加率 [%] (/ ×100)	最大着地濃度 出現距離 (m)
二酸化硫黄 (ppm)	排ガス量最大	0.010	0.0293	0.0393	74.5	110
	排ガス量最小	0.010	0.0215	0.0315	68.2	
二酸化窒素 (ppm)	排ガス量最大	0.022	0.0317	0.0537	59.1	
	排ガス量最小	0.022	0.0240	0.0460	52.2	
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	排ガス量最大	0.106	0.0117	0.1177	9.9	
	排ガス量最小	0.106	0.0086	0.1146	7.5	
塩化水素 (ppm)	排ガス量最大	0.001	0.0176	0.0186	94.6	
	排ガス量最小	0.001	0.0129	0.0139	92.8	

注) 気象条件は大気安定度 D、風速 1.5m/s、逆転層高さ 100m である。

表 5-1-54 ダウンウォッシュ・ダウンドラフト発生時における短期濃度予測結果

	予測ケース	バックラウンド 濃度 ()	付加濃度 (1時間値) ()	将来濃度 (1時間値) (= +)	付加率 [%] (/ ×100)	最大着地濃度 出現距離 (m)
二酸化硫黄 (ppm)	排ガス量最大	0.013	0.0077	0.0207	37.3	250
	排ガス量最小	0.013	0.0054	0.0184	29.5	
二酸化窒素 (ppm)	排ガス量最大	0.022	0.0094	0.0314	29.9	
	排ガス量最小	0.022	0.0067	0.0287	23.4	
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	排ガス量最大	0.106	0.0029	0.1089	2.7	
	排ガス量最小	0.106	0.0021	0.1081	1.9	
塩化水素 (ppm)	排ガス量最大	0.001	0.0046	0.0056	82.3	
	排ガス量最小	0.001	0.0033	0.0043	76.6	

注) 気象条件は大気安定度 D、風速 18.0m/s、風向 北北東である。

表 5-1-55 接地逆転層非貫通時における短期濃度予測結果

	予測ケース	バックラウンド 濃度 ()	付加濃度 (1時間値) ()	将来濃度 (1時間値) (= +)	付加率 [%] (/ × 100)	最大着地濃度 出現距離
二酸化硫黄 (ppm)	排ガス量最大	0.009	0.0066	0.0156	42.3	10km 注 2)
	排ガス量最小	0.009	0.0065	0.0155	42.0	
二酸化窒素 (ppm)	排ガス量最大	0.019	0.0081	0.0271	29.8	
	排ガス量最小	0.019	0.0080	0.0270	29.6	
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	排ガス量最大	0.081	0.0026	0.0836	3.2	
	排ガス量最小	0.081	0.0026	0.0836	3.1	
塩化水素 (ppm)	排ガス量最大	0.001	0.0040	0.0050	79.8	
	排ガス量最小	0.001	0.0039	0.0049	79.6	

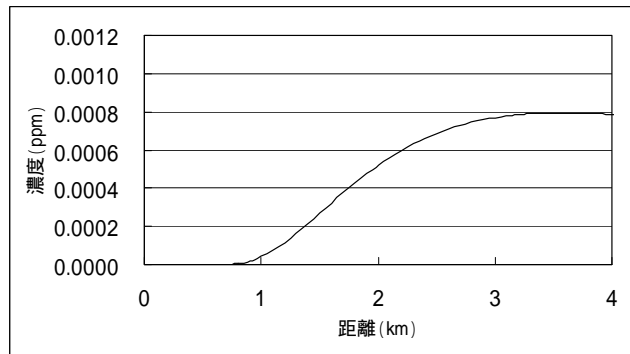
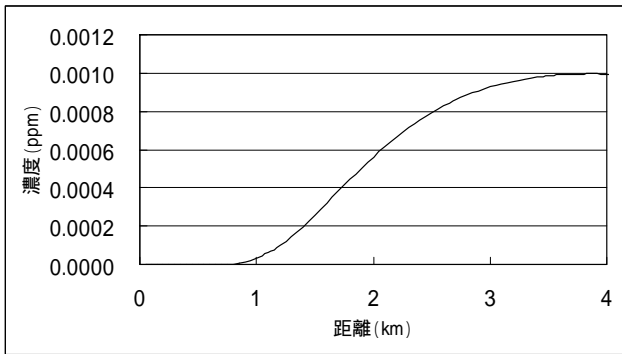
注 1) 気象条件は大気安定度 G、風速 0.7m/s、逆転層高さ 150m である。

注 2) 最大着地濃度出現距離が予測範囲である 4km を超えたため、10km まで拡大して予測している。

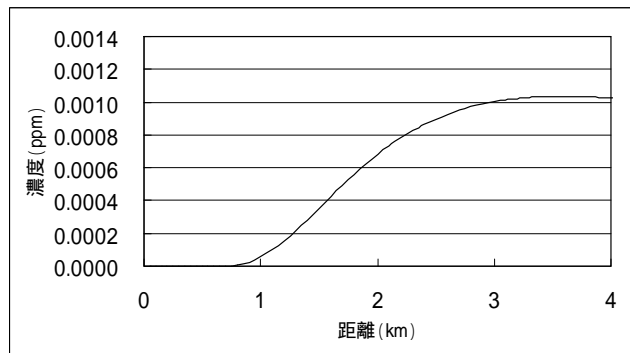
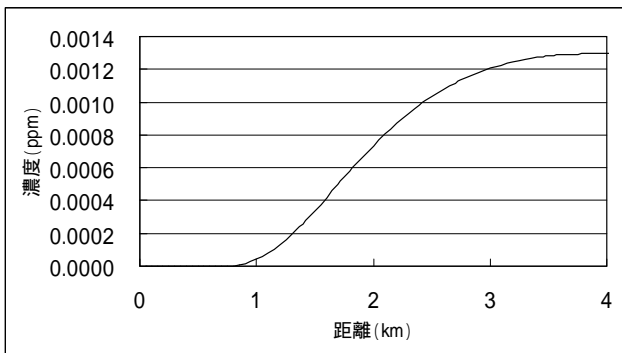
排ガス量最大

排ガス量最小

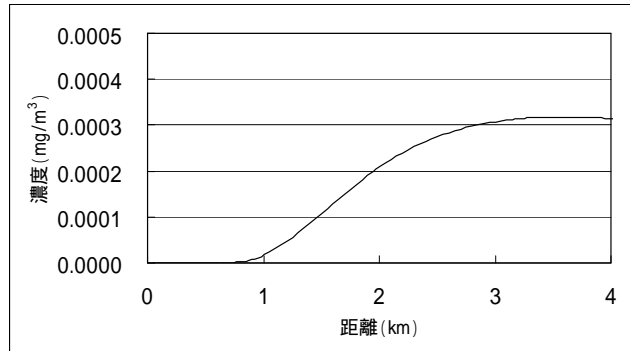
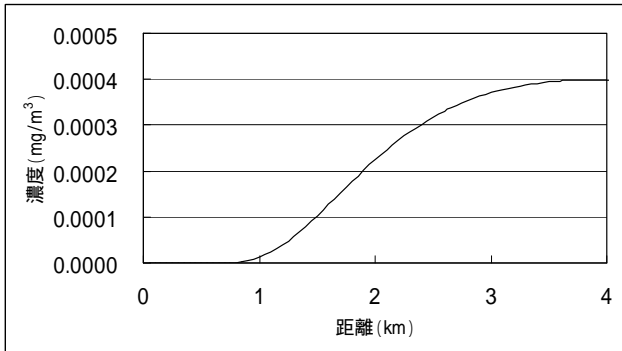
【二酸化硫黄】



【二酸化窒素】



【浮遊粒子状物質】



【塩化水素】

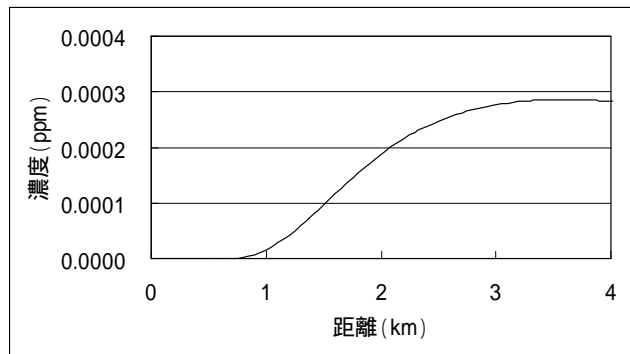
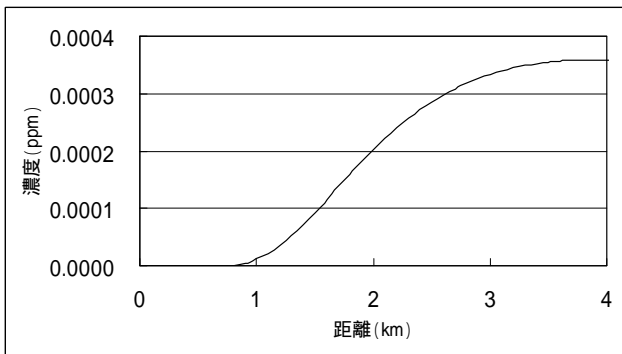
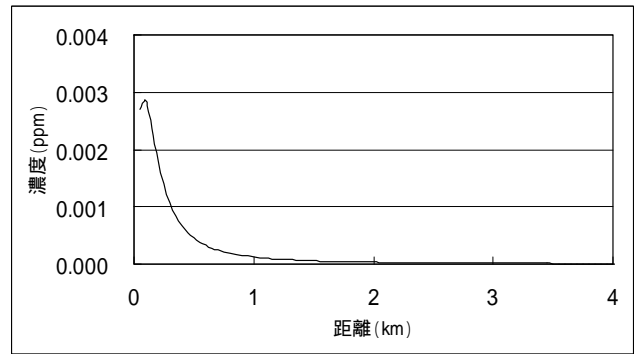
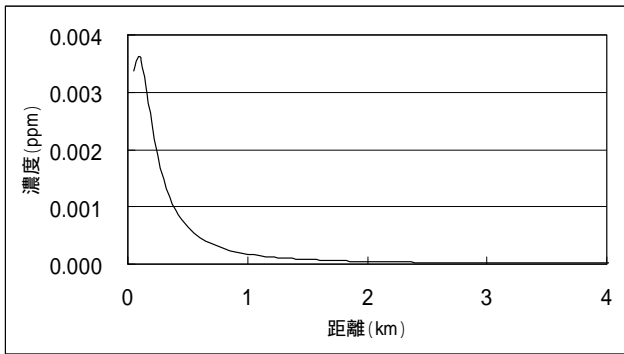


図 5-1-18 一般的な気象条件下における短期付加濃度の距離減衰* 図

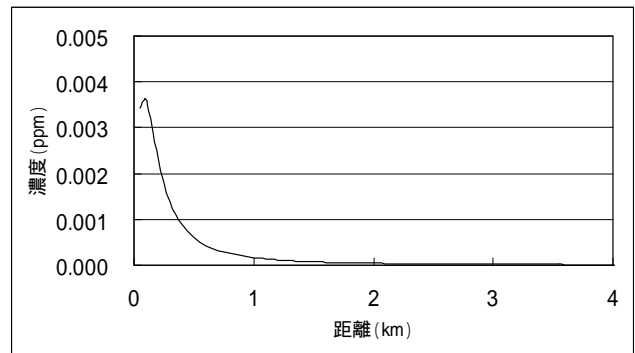
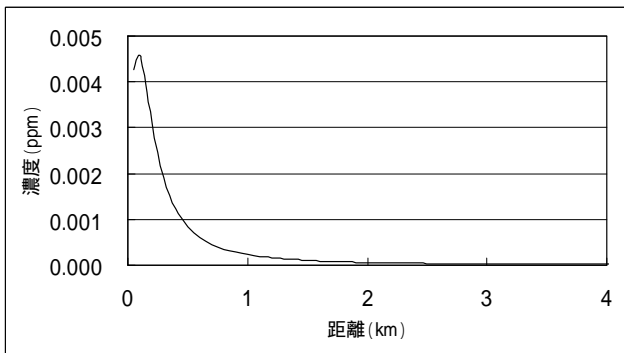
排ガス量最大

排ガス量最小

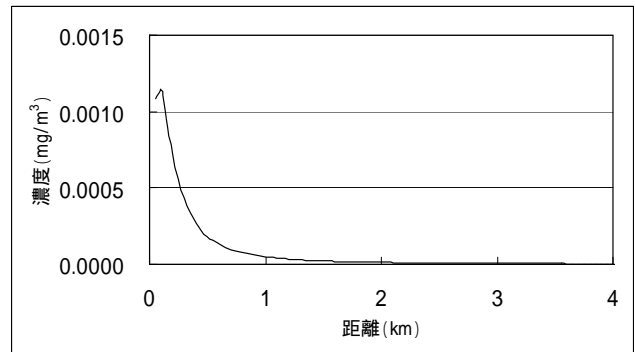
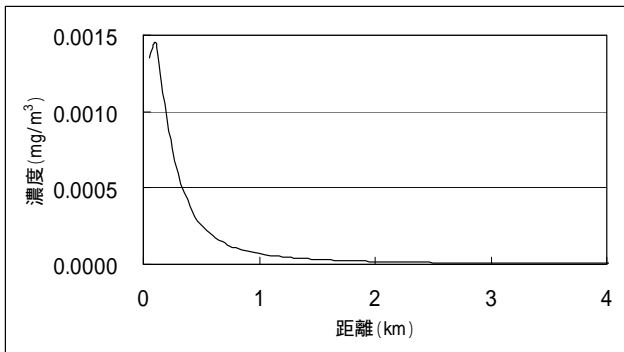
【二酸化硫黄】



【二酸化窒素】



【浮遊粒子状物質】



【塩化水素】

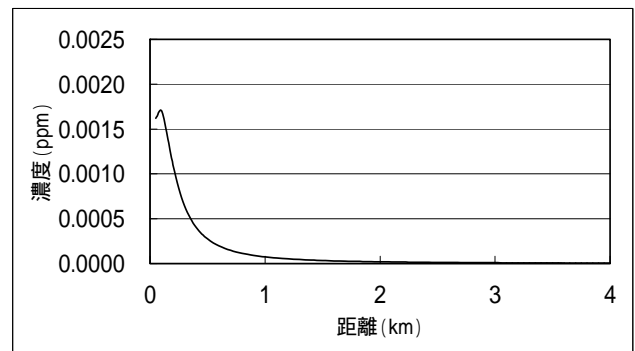
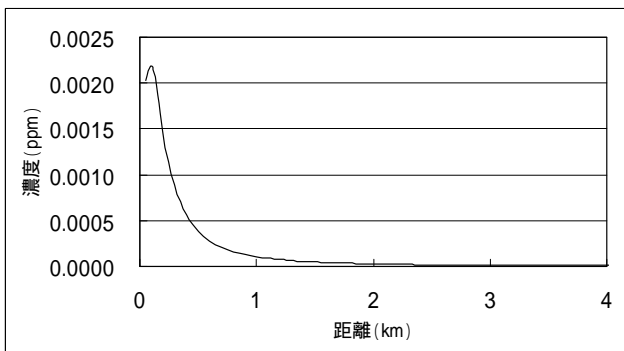
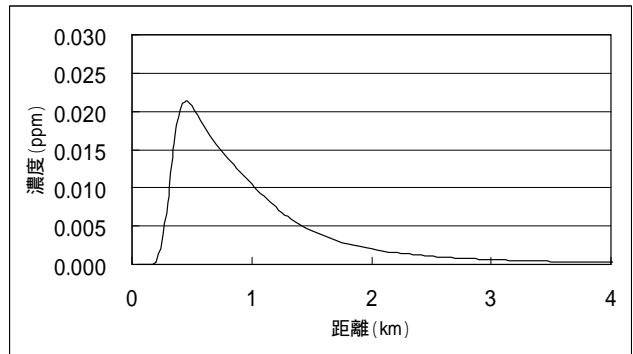
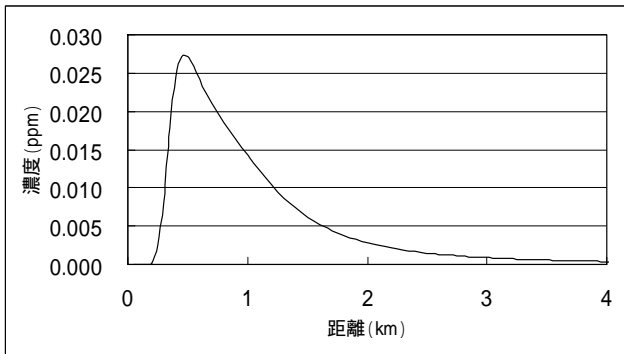


図 5-1-19 大気が不安定な気象条件下における短期付加濃度の距離減衰図

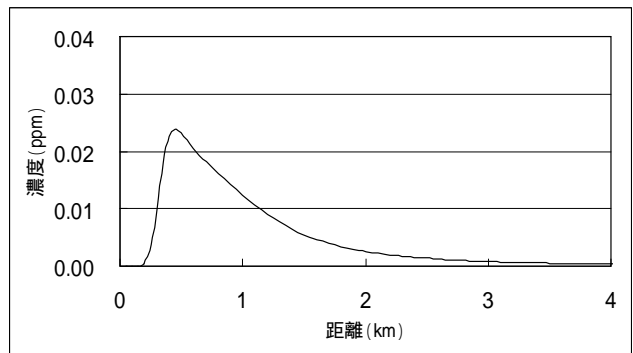
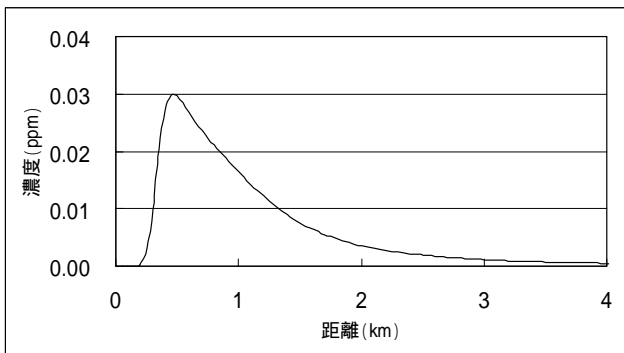
排ガス量最大

排ガス量最小

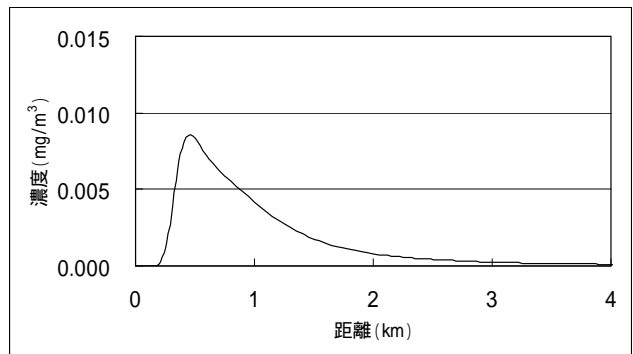
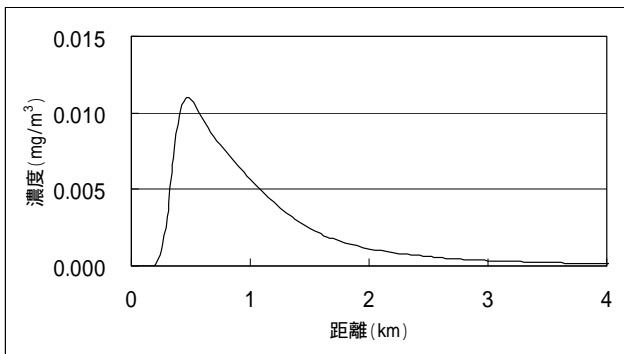
【二酸化硫黄】



【二酸化窒素】



【浮遊粒子状物質】



【塩化水素】

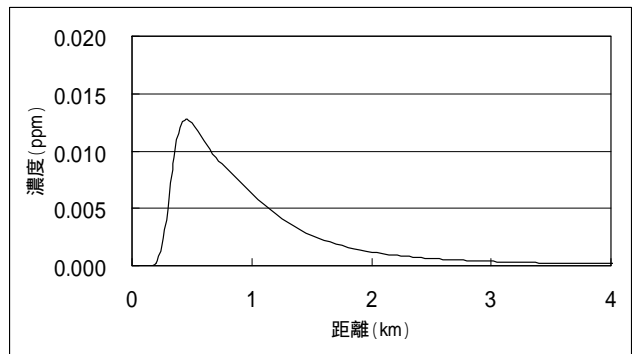
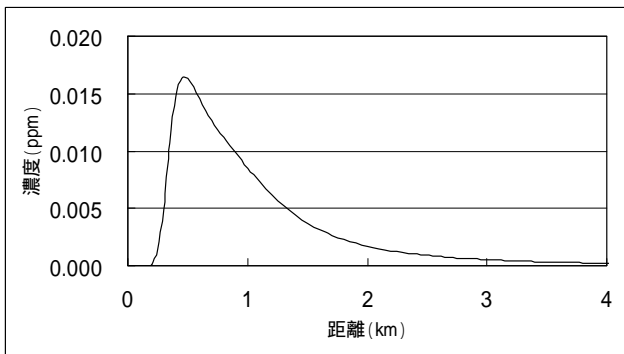
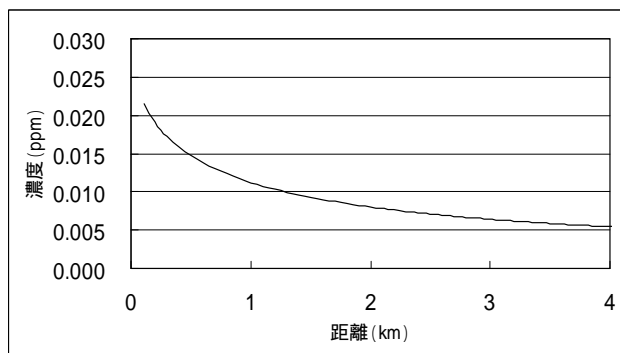
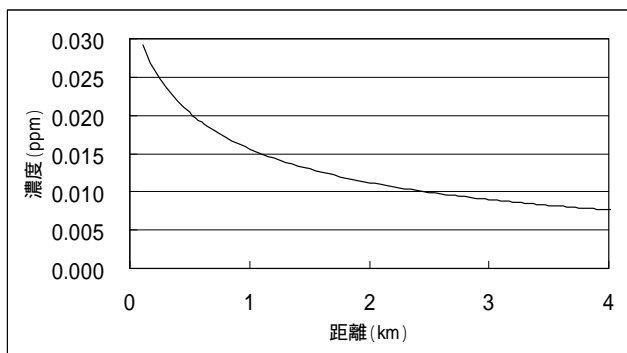


図 5-1-20 上層逆転層発生時（リッド状態）における短期付加濃度の距離減衰図

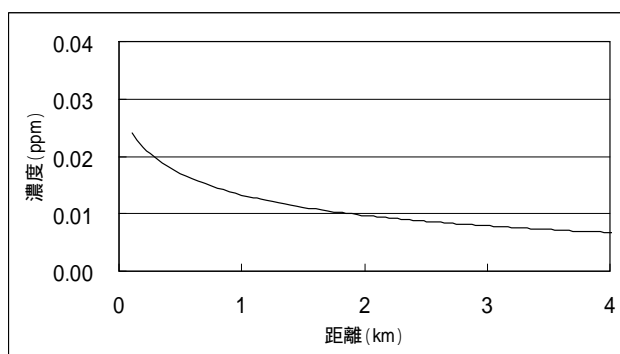
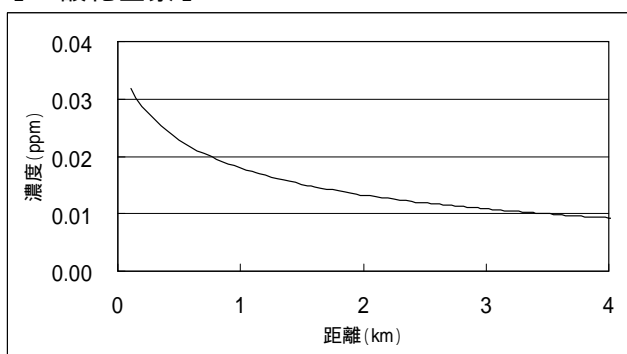
排ガス量最大

排ガス量最小

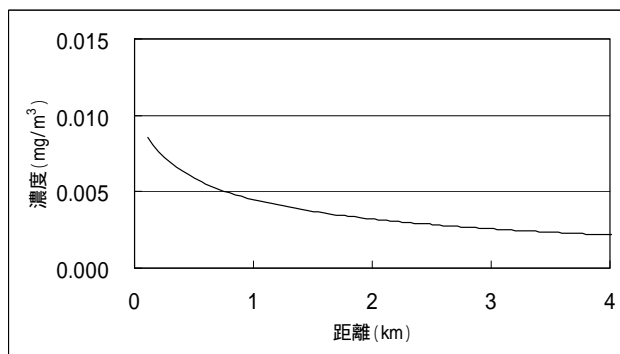
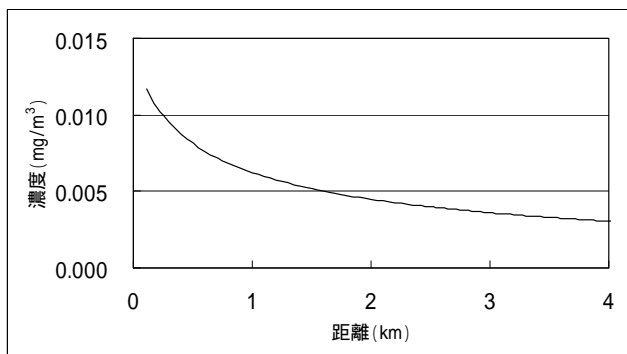
【二酸化硫黄】



【二酸化窒素】



【浮遊粒子状物質】



【塩化水素】

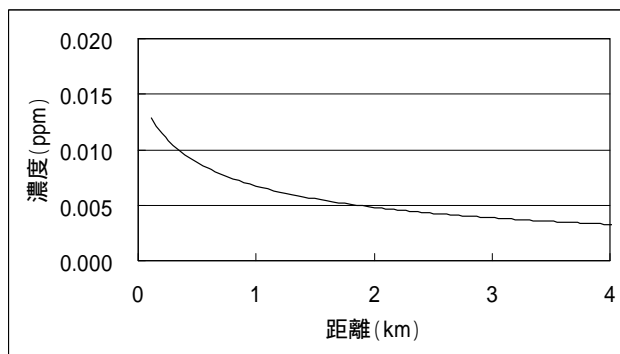
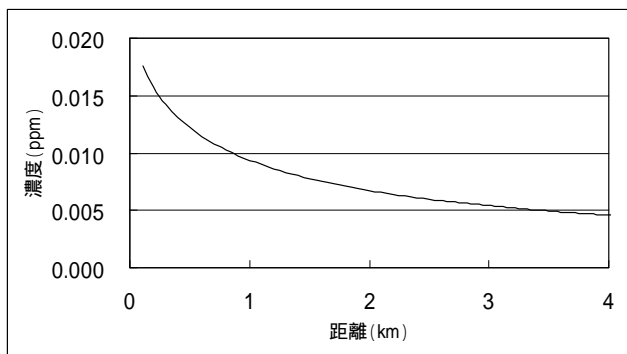
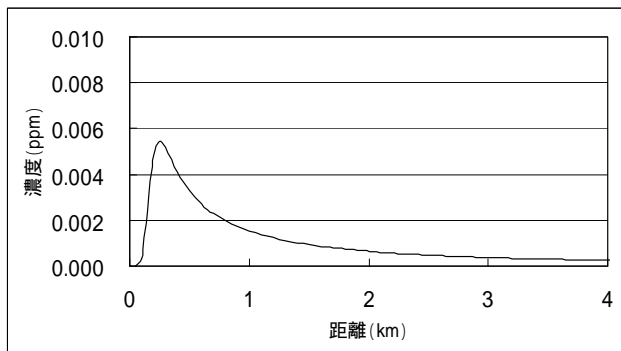
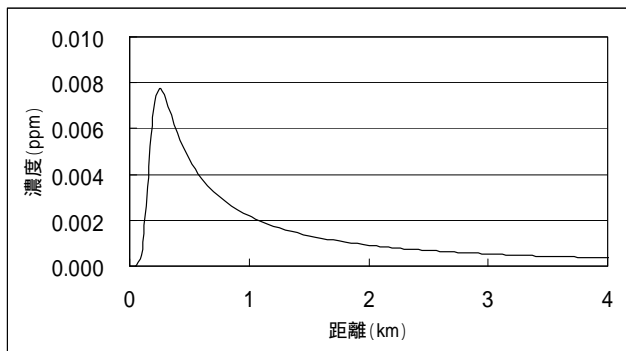


図 5-1-21 接地逆転層崩壊時（フュミゲーション発生時）における短期付加濃度の距離減衰図

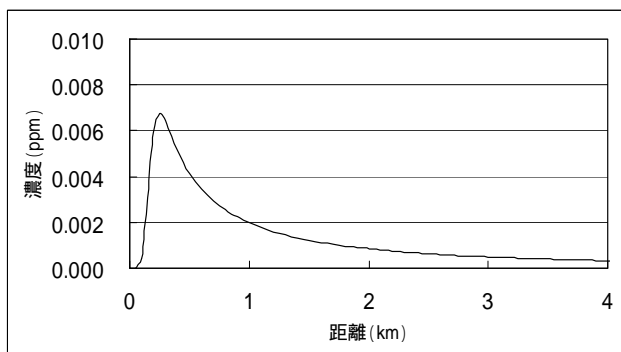
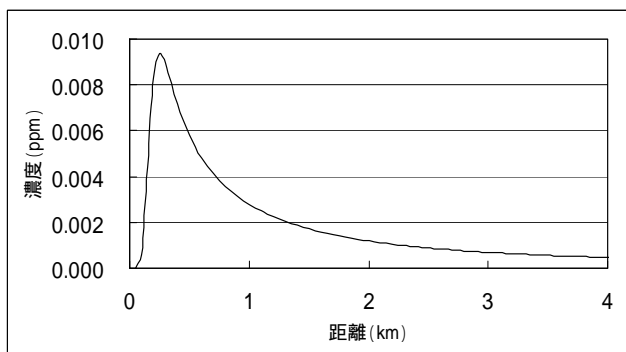
排ガス量最大

排ガス量最小

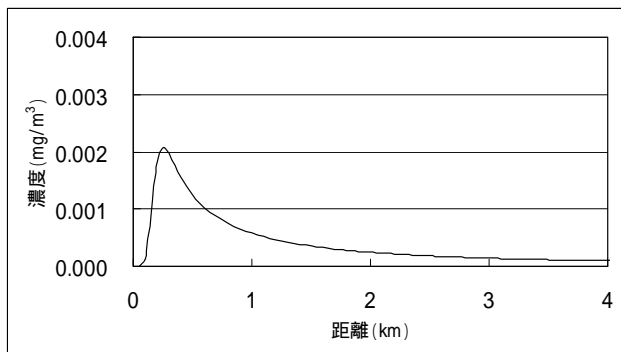
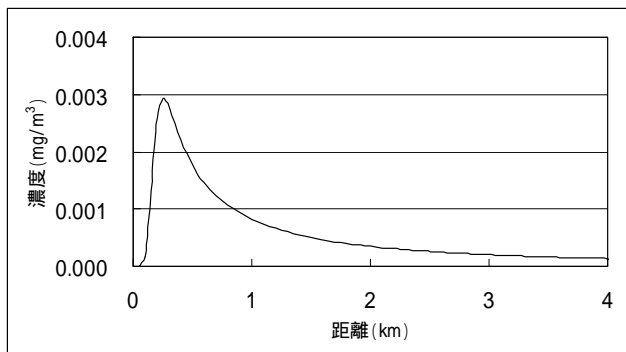
【二酸化硫黄】



【二酸化窒素】



【浮遊粒子状物質】



【塩化水素】

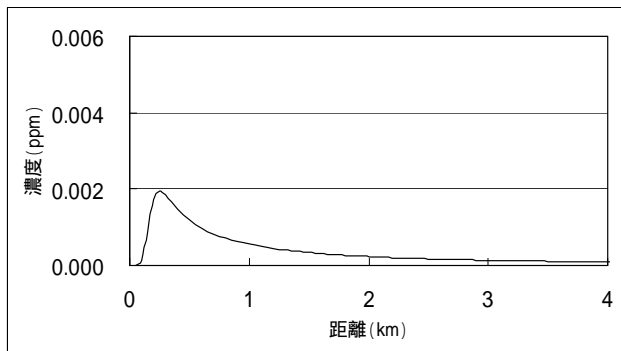
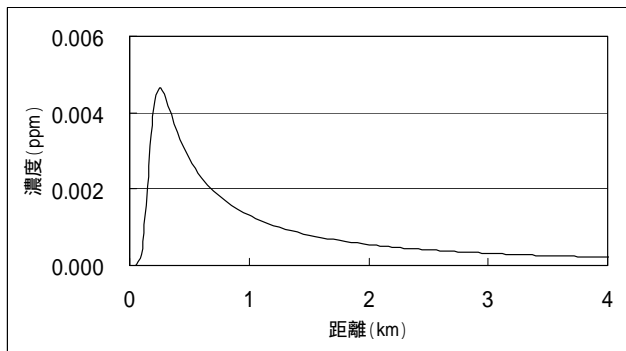
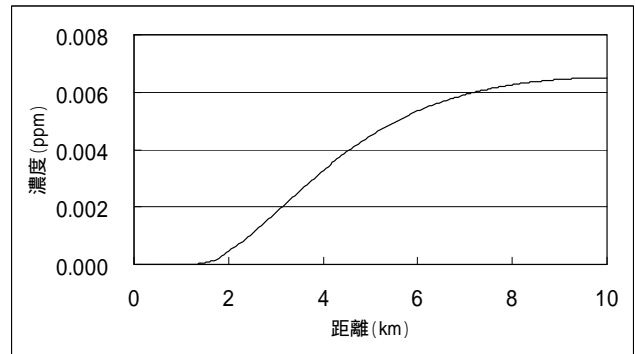
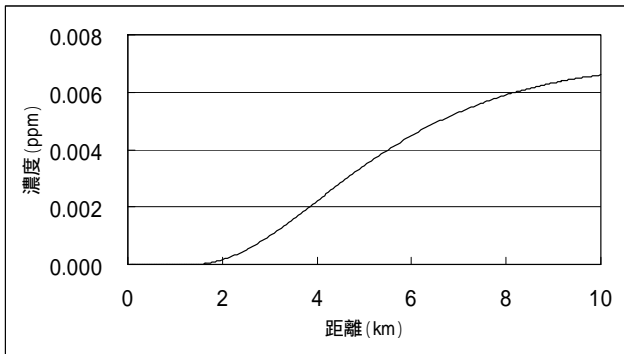


図 5-1-22 ダウンウォッシュ・ダウンドラフト発生時における短期付加濃度の距離減衰図

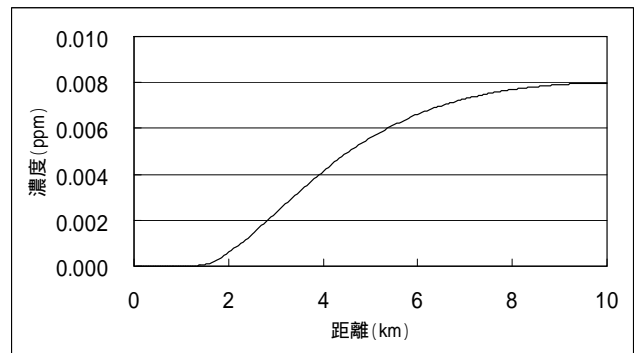
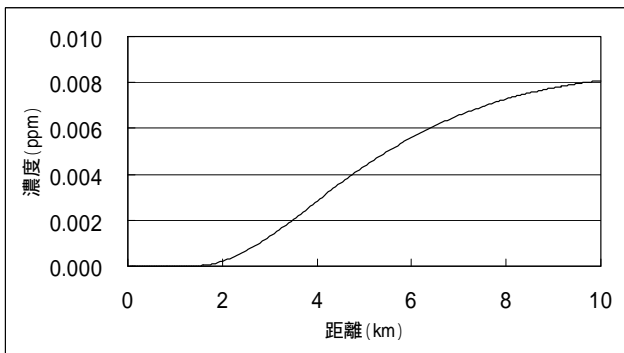
排ガス量最大

排ガス量最小

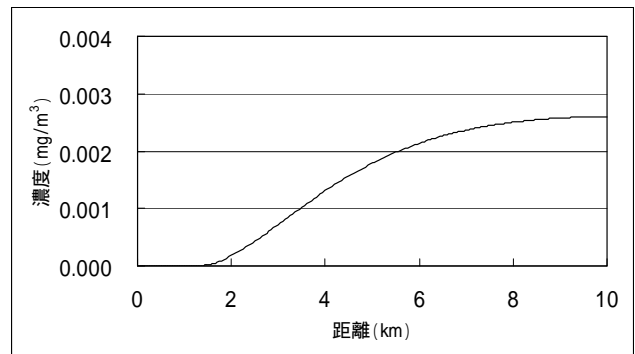
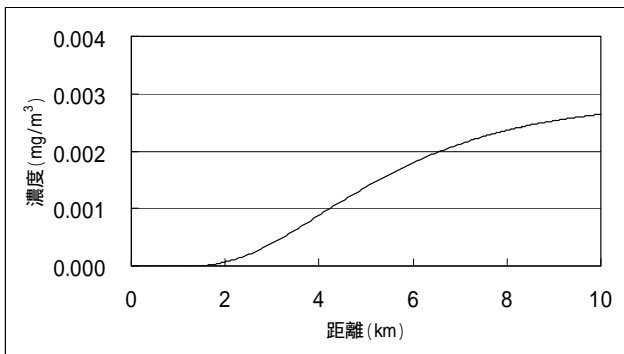
【二酸化硫黄】



【二酸化窒素】



【浮遊粒子状物質】



【塩化水素】

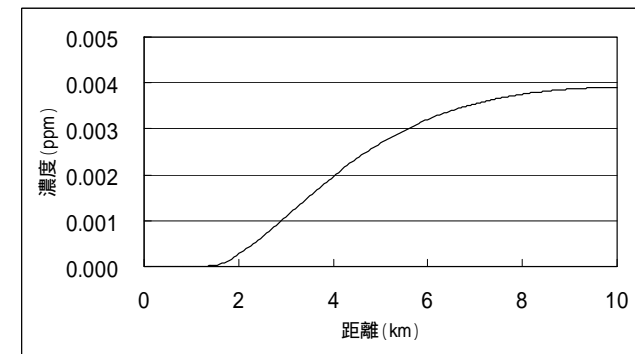
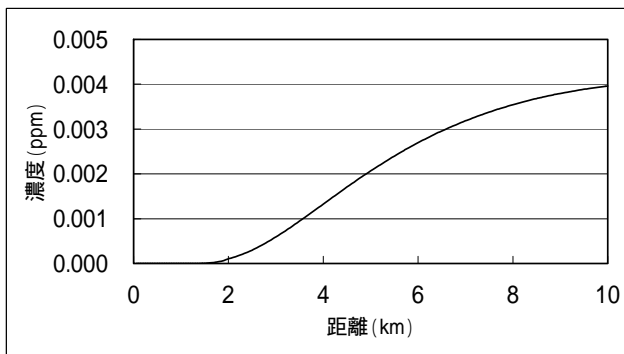


図 5-1-23 接地逆転層非貫通時における短期付加濃度の距離減衰図

注) 最大着地濃度出現距離が予測範囲である 4km を超えたため、10km まで拡大して予測している。

(3) 評価

1) 評価手法

影響の回避・低減に係る評価

排ガス処理対策等の環境保全措置について、それを採用した理由を検討資料等の提示により明らかにするとともに、環境影響を回避・低減するための検討が十分なされたかどうかを評価した。

環境保全施策との整合性に係る評価

長期予測及び短期予測の結果と評価の基準との比較を行い、環境保全施策と整合するか否かについて評価を行った。

整合性を検討する評価の基準は、環境基本法に基づく環境基準を基本とし、評価の基準は表 5-1-56 に示すとおりである。二酸化窒素については、環境基準及び短期暴露指針の下限值を評価の基準とした。

表 5-1-56 供用時（排ガス）に係る評価の基準（供用時（施設の稼働（排ガス））

予測項目		評価の基準	備考
二酸化硫黄	長期予測	0.04ppm 以下	環境基準
	短期予測	0.1ppm 以下	環境基準
二酸化窒素	長期予測	0.04ppm 以下	環境基準（0.04～0.06ppm までのゾーン内又はそれ以下）の下限值
	短期予測	0.1ppm 以下	中央公害対策審議会答申（昭和 53 年 3 月）による短期暴露指針（0.1ppm から 0.2ppm 以下）の下限值
浮遊粒子状物質	長期予測	0.10mg/m ³ 以下	環境基準
	短期予測	0.20mg/m ³ 以下	環境基準
ダイオキシン類	長期予測	0.6pg-TEQ/m ³ 以下	「ダイオキシン類対策特別措置法」（平成 11 年法律第 105 号）における環境基準
塩化水素	短期予測	0.02ppm 以下	「環境庁大気保全局通達（環大規第 136 号）」

2) 評価結果

影響の回避・低減に係る評価

供用時は、表 5-1-57 に示す排ガス処理対策等を講じることにより、事業者の
 実行可能な範囲内のできる限り大気汚染物質の影響は回避・低減されていると評
 価する。

表 5-1-57 影響の回避・低減対策（供用時（施設の稼働（排ガス）））

配慮の観点	環境保全措置		事業 主体	効果の程度	評価
	内容	措置の区分			
大気質負 荷 量の低減	燃焼設備等から発生 するガス（二酸化硫 黄、窒素酸化物、ばい じん、塩化水素及びダ イオキシン類）は、消 石灰噴霧、バグフィル ター等の設備を設け、 排ガス対策を講じる。	低減	事業者	大気汚染物質の排 出量を低減でき る。 適切な燃焼管理を 行うことで、大気 汚染物質の排出量 を低減できる。ま た、安定した排ガ ス吐出速度を確保 して大気汚染物質 を拡散させること で、周辺への影響 を低減できる。	これらの環境保全 措置を適切に実施 することで、環境 に及ぼす影響を低 減できる。
	二酸化硫黄、窒素酸化 物、ばいじん、塩化水 素及びダイオキシン類 について、法令で定め る規制基準値等を下回 る環境保全目標値を設 定し、維持管理を行 う。				
	塩化水素の維持管理値 については、50ppm か ら 30ppm への見直しを 行う。				
	施設の運転に当たっ ては、運転管理を十分 に行う。				

環境保全施策との整合性に係る評価

ア 長期予測

長期予測結果と供用時（排ガス）に係る評価の基準の比較結果は、表 5-1-58
 に示すとおりである。

予測結果は、いずれも評価の基準を下回っており、環境保全施策との整合性
 は図られていると評価する。

表 5-1-58(1) 長期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る
評価の基準の比較結果（二酸化硫黄）

単位：ppm

予測ケース	予測地点	将来濃度 (年平均値)	将来濃度 (日平均値の 年間2%除外値)	付加率 [%]	評価の基準
排ガス 量最大	下五貫野集落	0.00415	0.009	3.6	0.04 以下
	小泉集落	0.00309	0.007	2.9	
	西福島局	0.00104	0.003	3.8	
	北四ッ屋局	0.00309	0.007	2.9	
	深谷局	0.00402	0.009	0.5	
	最大着地濃度地点 (対象事業実施区域より 東南東に約300m付近)	0.00477	0.010	16.1	
排ガス 量最小	下五貫野集落	0.00414	0.009	3.4	
	小泉集落	0.00307	0.007	2.3	
	西福島局	0.00104	0.003	3.8	
	北四ッ屋局	0.00309	0.007	2.9	
	深谷局	0.00402	0.009	0.5	
	最大着地濃度地点 (対象事業実施区域より 東南東に約300m付近)	0.00469	0.010	14.7	

注) 将来濃度にはバックグラウンド濃度を含む。

表 5-1-58(2) 長期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る
評価の基準の比較結果（二酸化窒素）

単位：ppm

予測ケース	予測地点	将来濃度 (年平均値)	将来濃度 (日平均値の 年間98%値)	付加率 [%]	評価の基準
排ガス 量最大	下五貫野集落	0.00420	0.011	4.8	0.04 以下
	小泉集落	0.00312	0.009	3.8	
	西福島局	0.01406	0.032	0.4	
	北四ッ屋局	0.00911	0.022	1.2	
	深谷局	0.00903	0.021	0.3	
	最大着地濃度地点 (対象事業実施区域より 東南東に約300m付近)	0.00501	0.013	20.2	
排ガス 量最小	下五貫野集落	0.00418	0.011	4.3	
	小泉集落	0.00310	0.009	3.2	
	西福島局	0.01406	0.032	0.4	
	北四ッ屋局	0.00912	0.022	1.3	
	深谷局	0.00902	0.021	0.2	
	最大着地濃度地点 (対象事業実施区域より 東南東に約300m付近)	0.00491	0.013	18.5	

注) 将来濃度にはバックグラウンド濃度を含む。

表 5-1-58(3) 長期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る
評価の基準の比較結果（浮遊粒子状物質）

単位：ppm

予測 ケース	予測地点	将来濃度 (年平均値)	将来濃度 (日平均値の 年間2%除外値)	付加率 [%]	評価の基準
排ガス 量最大	下五貫野集落	0.01706	0.043	0.4	0.1 以下
	小泉集落	0.02403	0.055	0.1	
	西福島局	0.01902	0.046	0.1	
	北四ッ屋局	0.01803	0.044	0.2	
	深谷局	0.01701	0.043	0.1	
	最大着地濃度地点 (対象事業実施区域より 東南東に約300m付近)	0.02129	0.050	1.4	
排ガス 量最小	下五貫野集落	0.01705	0.043	0.3	
	小泉集落	0.02403	0.055	0.1	
	西福島局	0.01902	0.046	0.1	
	北四ッ屋局	0.01803	0.044	0.2	
	深谷局	0.01701	0.043	0.1	
	最大着地濃度地点 (対象事業実施区域より 東南東に約300m付近)	0.02126	0.050	1.2	

注) 将来濃度にはバックグラウンド濃度を含む。

表 5-1-58(4) 長期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る
評価の基準の比較結果（ダイオキシン類）

単位：pg-TEQ/m³以下

予測 ケース	予測地点	将来濃度 (年平均値)	付加率 [%]	評価の基準
排ガス 量最大	下五貫野集落	0.01228	2.3	0.6 以下
	小泉集落	0.01417	1.2	
	西福島局	0.03108	0.3	
	北四ッ屋局	0.06716	0.2	
	深谷局	0.03104	0.1	
	最大着地濃度地点（対象事業実施 区域より東南東に約300m付近）	0.01447	10.2	
排ガス 量最小	下五貫野集落	0.01226	2.1	
	小泉集落	0.01414	1.0	
	西福島局	0.03108	0.3	
	北四ッ屋局	0.06717	0.3	
	深谷局	0.03104	0.1	
	最大着地濃度地点（対象事業実施 区域より東南東に約300m付近）	0.01432	9.2	

注) 将来濃度にはバックグラウンド濃度を含む。

イ 短期予測

短期予測結果と供用時（排ガス）に係る評価の基準の比較結果は、表 5-1-59 に示すとおりである。

予測結果は、いずれも評価の基準を下回っており、環境保全施策との整合性は図られていると評価する。

表 5-1-59(1) 短期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る評価の基準の比較結果（二酸化硫黄）

単位：ppm

条件	気象条件	予測ケース	将来濃度 (1時間値)	付加率 [%]	最大着地濃度出現距離	評価の基準
一般的な気象条件下	大気安定度 D、 風速 1.5m/s	排ガス量最大	0.0110	9.1	3,900m	0.1 以下
		排ガス量最小	0.0108	7.4	3,600m	
大気が不安定な気象条件下	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0136	26.6	100m	
		排ガス量最小	0.0128	22.1		
上層逆転層発生時 (リッド状態)	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0372	73.1	450m	
		排ガス量最小	0.0314	68.1		
接地逆転層崩壊時 (フュミゲーション発生時)	大気安定度 D、 風速 1.5m/s、 逆転層高さ 100m	排ガス量最大	0.0393	74.5	110m	
		排ガス量最小	0.0315	68.2		
ダウンウォッシュ・ ダウンドラフト発生時	大気安定度 D、 風速 18.0m/s、 風向 北北東	排ガス量最大	0.0207	37.3	250m	
		排ガス量最小	0.0184	29.5		
接地逆転層非貫通時	大気安定度 G、 風速 0.7m/s、 逆転層高さ 150m	排ガス量最大	0.0156	42.3	10km ^{注)}	
		排ガス量最小	0.0155	42.0		

注) 最大着地濃度出現距離が予測範囲である 4km を超えたため、10km まで拡大して予測している。

表 5-1-59(2) 短期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る評価の基準の比較結果（二酸化窒素）

単位：ppm

条件	気象条件	予測ケース	将来濃度 (1時間値)	付加率 [%]	最大着地濃度出現距離	評価の基準
一般的な気象条件下	大気安定度 D、 風速 1.5m/s	排ガス量最大	0.0233	5.6	3,900m	0.1 以下
		排ガス量最小	0.0230	4.5	3,600m	
大気が不安定な気象条件下	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0146	31.4	100m	
		排ガス量最小	0.0136	26.5		
上層逆転層発生時 (リッド状態)	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0398	74.9	450m	
		排ガス量最小	0.0339	70.5		
接地逆転層崩壊時 (フュミゲーション発生時)	大気安定度 D、 風速 1.5m/s、 逆転層高さ 100m	排ガス量最大	0.0537	59.1	110m	
		排ガス量最小	0.0460	52.2		
ダウンウォッシュ・ ダウンドラフト発生時	大気安定度 D、 風速 18.0m/s、 風向 北北東	排ガス量最大	0.0314	29.9	250m	
		排ガス量最小	0.0287	23.4		
接地逆転層非貫通時	大気安定度 G、 風速 0.7m/s、 逆転層高さ 150m	排ガス量最大	0.0271	29.8	10km ^{注)}	
		排ガス量最小	0.0270	29.6		

注) 最大着地濃度出現距離が予測範囲である 4km を超えたため、10km まで拡大して予測している。

表 5-1-59(3) 短期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る評価の基準の比較結果（浮遊粒子状物質）

単位：mg/m³

条件	気象条件	予測ケース	将来濃度 (1時間値)	付加率 [%]	最大着地濃度出現距離	評価の基準
一般的な気象条件下	大気安定度 D、 風速 1.5m/s	排ガス量最大	0.1064	0.4	3,900m	0.2 以下
		排ガス量最小	0.1063	0.3	3,600m	
大気が不安定な気象条件下	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0665	2.2	100m	
		排ガス量最小	0.0661	1.7		
上層逆転層発生時 (リッド状態)	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0759	14.4	450m	
		排ガス量最小	0.0735	11.6		
接地逆転層崩壊時 (フュミゲーション発生時)	大気安定度 D、 風速 1.5m/s、 逆転層高さ 100m	排ガス量最大	0.1177	9.9	110m	
		排ガス量最小	0.1146	7.5		
ダウンウォッシュ・ ダウンドラフト発生時	大気安定度 D、 風速 18.0m/s、 風向 北北東	排ガス量最大	0.1089	2.7	250m	
		排ガス量最小	0.1081	1.9		
接地逆転層非貫通時	大気安定度 G、 風速 0.7m/s、 逆転層高さ 150m	排ガス量最大	0.0836	3.2	10km ^{注)}	
		排ガス量最小	0.0836	3.1		

注) 最大着地濃度出現距離が予測範囲である 4km を超えたため、10km まで拡大して予測している。

表 5-1-59(4) 短期予測結果と供用時（施設の稼働（排ガス））に係る評価の基準の比較結果（塩化水素）

単位：ppm

条件	気象条件	予測ケース	将来濃度 (1時間値)	付加率 [%]	最大着地濃度出現距離	評価の基準
一般的な気象条件下	大気安定度 D、 風速 1.5m/s	排ガス量最大	0.0016	37.4	3,900m	0.02 以下
		排ガス量最小	0.0015	32.3	3,600m	
大気が不安定な気象条件下	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0032	68.6	100m	
		排ガス量最小	0.0027	63.0		
上層逆転層発生時 (リッド状態)	大気安定度 A、 風速 0.7m/s	排ガス量最大	0.0173	94.2	450m	
		排ガス量最小	0.0138	92.8		
接地逆転層崩壊時 (フュミゲーション発生時)	大気安定度 D、 風速 1.5m/s、 逆転層高さ 100m	排ガス量最大	0.0186	94.6	110m	
		排ガス量最小	0.0139	92.8		
ダウンウォッシュ・ ダウンドラフト発生時	大気安定度 D、 風速 18.0m/s、 風向 北北東	排ガス量最大	0.0056	82.3	250m	
		排ガス量最小	0.0043	76.6		
接地逆転層非貫通時	大気安定度 G、 風速 0.7m/s、 逆転層高さ 150m	排ガス量最大	0.0050	79.8	10km ^{注)}	
		排ガス量最小	0.0049	79.6		

注) 最大着地濃度出現距離が予測範囲である 4km を超えたため、10km まで拡大して予測している。